

1. 聞きなさい。イスラエル。あなたはきょう、ヨルダンを渡って、あなたよりも大きくて強い国々を占領しようとしている。その町々は大きく、城壁は天に高くそびえている。
2. その民は大きくて背が高く、あなたの知っているアナク人である。あなたは聞いた。「だれがアナク人に立ち向かうことができようか。」
3. きょう、知りなさい。あなたの神、主ご自身が、焼き尽くす火として、あなたの前に進まれ、主が彼らを根絶やしにされる。主があなたの前で彼らを征服される。あなたは、主が約束されたように、彼らをただちに追い払って、滅ぼすのだ。
4. あなたの神、主が、あなたの前から彼らを追い出されたとき、あなたは心の中で、「私が正しいから、主が私にこの地を得させてくださったのだ。」と言ってはならない。これらの国々が悪いために、主はあなたの前から彼らを追い出そうとしておられるのだ。
5. あなたが彼らの地を所有することのできるのには、あなたが正しいからではなく、またあなたの心がまっすぐだからでもない。それは、これらの国々が悪いために、あなたの神、主が、あなたの前から彼らを追い出そうとしておられるのだ。また、主があなたの先祖、アブラハム、イサク、ヤコブになさった誓いを果たすためである。
6. 知りなさい。あなたの神、主は、あなたが正しいということで、この良い地をあなたに与えて所有させられるのではない。あなたはうなじのこわい民であるからだ。
7. あなたは荒野で、どんなにあなたの神、主を怒らせたかを覚えていなさい。忘れてはならない。エジプトの地を出た日から、この所に来るまで、あなたがたは主に逆らいどおしであった。
8. あなたがたはホレブで、主を怒らせたので、主は怒ってあなたがたを根絶やしにしようとした。
9. 私が石の板、主があなたがたと結ばれた契約の板を受けるために、山に登ったとき、私は四十日四十夜、山にとどまり、パンも食わず、水も飲まなかった。
10. その後、主は神の指で書きしるされた石の板二枚を私に授けられた。その上には、あの集まりの日に主が山で火の中から、あなたがたに告げられたことばが、ことごとく、そのまま書かれてあった。
11. こうして四十日四十夜の終わりに、主がその二枚の石の板、契約の板を私に授けられた。
12. そして主は私に仰せられた。「さあ、急いでここから下れ。あなたがエジプトから連れ出したあなたの民が、墮落してしまった。彼らはわたしが命じておいた道から早くもそれて、自分たちのために鑄物の像を造った。」
13. さらに主は私にこう言われた。「わたしがこの民を見るのに、この民は実にうなじのこわい民だ。
14. わたしのするがままにさせよ。わたしは彼らを根絶やしにし、その名を天の下から消し去ろう。しかし、わたしはあなたを、彼らよりも強い、人数の多い国民としよう。」
15. 私は向き直って山から降りた。山は火で燃えていた。二枚の契約の板は、私の両手にあった。
16. 私が見ると、見よ、あなたがたはあなたがたの神、主に罪を犯して、自分たちのために鑄物の子牛を造り、主があなたがたに命じられた道から早くもそれてしまっていた。
17. それで私はその二枚の板をつかみ、両手でそれを投げつけ、あなたがたの目の前でこれを打ち砕いた。
18. そして私は、前のように四十日四十夜、主の前にひれ伏して、パンも食わず、水も飲まなかった。あなたがたが主の目の前に悪を行ない、御怒りを引き起こした、その犯したすべての罪のためであり、
19. 主が怒ってあなたがたを根絶やしにしようとした激しい憤りを私が恐れたからだった。そのときも、主は私の願いを聞き入れられた。
20. 主は、激しくアロンを怒り、彼を滅ぼそうとされたが、そのとき、私はアロンのためにも、とりなしをした。
21. 私はあなたがたが作った罪、その子牛を取って、火で焼き、打ち砕き、ちりになるまでよくすりつぶした。そし

て私は、そのちりを山から流れ下る川に投げ捨てた。

22. あなたがたはまた、タブエラでも、マサでも、キプロテ・ハタアワでも、主を怒らせた。
23. 主があなたがたをカデシュ・バルネアから送り出されるとき、「上って行って、わたしがあなたがたに与えている地を占領せよ。」と言われたが、あなたがたは、あなたがたの神、主の命令に逆らい、主を信ぜず、その御声にも聞き従わなかった。
24. 私があなたがたを知った日から、あなたがたはいつも、主にそむき逆らってきた。
25. それで、私は、その四十日四十夜、主の前にひれ伏していた。それは主があなたがたを根絶やしにすると言われたからである。
26. 私は主に祈って言った。「神、主よ。あなたの所有の民を滅ぼさないでください。彼らは、あなたが偉大な力をもって贖い出し、力強い御手をもってエジプトから連れ出された民です。
27. あなたのしもべ、アブラハム、イサク、ヤコブを覚えてください。そしてこの民の強情と、その悪と、その罪とに目を留めないでください。
28. そうでないと、あなたがそこから私たちを連れ出されたあの国では、『主は、約束した地に彼らを導き入れることができないので、また彼らを憎んだので、彼らを荒野で死なせるために連れ出したのだ。』と言うでしょう。
29. しかし彼らは、あなたの所有の民です。あなたがその大いなる力と伸べられた腕とをもって連れ出された民です。」

説教

申命記9章は、これから約束の地カナン入りを果たそうとしているイスラエルの民が高ぶらないよう、モーセが警告する場面です。

「聞きなさい。イスラエル。あなたはきょう、ヨルダンを渡って、あなたよりも大きくて強い国々を占領しようとしている。その町々は大きく、城壁は天に高くそびえている。その民は大きくて背が高く、あなたの知っているアナク人である。あなたは聞いた。『だれがアナク人に立ち向かうことができようか。』」(9:1)

「聞きなさい」とは、特別に大切な戒めを語る時の呼びかけです。

イスラエルはこれからカナンの地に攻め入るのですが、しかし、その地を攻め落とすことは必ずしも簡単なことではなく、むしろ見た目には困難なことです。なぜなら、そこには「あなたよりも大きくて強い国々」が存在しているからです。「その町々は大きく、城壁は天に高くそびえている。その民は大きくて背が高く、あなたの知っているアナク人である」と言われます。四十年前、イスラエルはこれらの光景を目の当たりにして震え上がり、神の突撃命令を拒んだために神の怒りを受けて、四十年間荒野をさまよいました。四十年経っても、カナンには相変わらずイスラエルより「大きくて強い国々」が存在していたようです。

それでモーセは、あらためてカナン人たちの強さを確認した後、こう告げるのです。「きょう、知りなさい。あなたの神、主ご自身が、焼き尽くす火として、あなたの前に進まれ、主が彼らを根絶やしにされる。主があなたの前で彼らを征服される。あなたは、主が約束されたように、彼らをただちに追い払って、滅ぼすのだ。」(3)

ここでモーセは神が「焼き尽くす火」であると表現します。どんなに敵が強くても、彼らと共におられる神は、あらゆる敵を「焼き尽くす火」であり、「あなたの前に進まれ、主が彼らを根絶やしにされ」ます。それで、敵は確かに強いだけけれども、それでも「あなたは、主が約束されたように、彼らをただちに追い払って、滅ぼす」ことができると言うのでした。

ただ、ここで一つの深刻な誘惑が生じます。それは、無事、悲願のカナン征服を果たした時、イスラエルの民が、心

の中で、「私が正しいから、主が私にこの地を得させてくださったのだ」と呟く高慢の誘惑です(4)。四十年前に神の力と約束を信じず失敗した世代は既に荒野で死に絶えてしまい、新世代はその教訓を生かし、神の約束を信じてカナンの地を占領します。そして、それが、自分たちの能力を完全に超越した、神の全能の力によるものであるということは、新世代のイスラエル全員の共通の理解であり、信仰でありました。しかし、そうなったらそうなったで、つまり、神の力によってカナンの地を自分たちのものとして相続できたからできたで、新たに次なる霊的な誘惑が生じます。それが、「私が正しいから、主が私にこの地を得させてくださったのだ」という高慢な誤解なのです。

この場合、神が全能の神であり、神の 100%全面的な助けによってカナンを征服できたという事実には疑いはありません。四十年前にはこの神の助けが信用できずに旧世代は失敗したのですが、新世代はそういう過ちは犯しません。神は全能の神であり、どんなに困難な中であっても助けてくださる、その信仰に揺るぎはないのです。でも、その点では四十年前の致命的な弱点は克服できてはいるものの、新世代の新たな問題は、彼らの信じる全能の神がどうして自分たちを助けて祝福してくださったのかという理解です。すなわち、「私が正しいから、主が私にこの地を得させてくださったのだ」と高慢にも自己義認して自己満足に陥る誘惑があるとモーセは警告するのです。それは、神が全能の御手を動かして私に祝福を与えてくださったのは、ひとえに「私が正しいから」だと勘違いする誘惑です。このような、神に栄光を帰さずに自分に栄光を帰したくなる誘惑は、なかなか深刻です。荒野をさまよう不毛の人生のただ中では、ただただ神だけを頼りに、必死に神にすがりながらひたすら身を低くして謙遜に生活するのですが、苦しかった下積みの時代も終わり、神の約束通りに「乳と蜜の流れる」祝福に満ちたカナンの地に入って、そこで豊かに楽しく生活するようになると、今度は、「自分が正しかったから」「自分が頑張ったから、良くやったから、賢かったから…」今日の繁栄を手にしたと、要するに自分がいかに偉大に生きてきたかを人々にひけらかす「成功の秘訣」を語り出すようになるのです。

これに対して、モーセは、「『私が正しいから、主が私にこの地を得させてくださったのだ。』と言ってはならない」と警告します(4)。「あなたが彼らの地を所有することのできるのは、あなたが正しいからではなく、またあなたの心がまっすぐだからでもない。それは、これらの国々が悪いために、あなたの神、主が、あなたの前から彼らを追い出そうとしておられるのだ。また、主があなたの先祖、アブラハム、イサク、ヤコブになさった誓いを果たすためである。」(5) これによると、どうしてイスラエルがカナンを征服できたのかといえば、その理由は、まず、カナンの「国々が悪いために」神は彼らを罰して、彼らをカナンから追い出されたと言います。そして、何より、究極の理由は、それを通して「主があなたの先祖、アブラハム、イサク、ヤコブになさった誓いを果たすためである」と言います。

すべては神の恵みなのです。神は一方向的な愛でアブラハムをこの世から選んで召し、永遠に変わらぬ愛をもって誓った「誓い」を果たされました。その結果として、すなわち、あくまで神のひたすらな恵みによって、イスラエルはカナンの地を相続できるのであって、「私が正しいから、主が私にこの地を得させてくださったのだ」などと自惚れている余地など少しもありませんでした。モーセは、何度も、繰り返し、自己義認の自惚れを戒めます。「『私が正しいから、主が私にこの地を得させてくださったのだ。』と言ってはならない。」(4)「あなたが彼らの地を所有することのできるのは、あなたが正しいからではなく、またあなたの心がまっすぐだからでもない。」(5)「知りなさい。あなたの神、主は、あなたが正しいということで、この良い地をあなたに与えて所有させられるのではない。」(6)

「正しい」という言葉は法廷用語で、「義、正義、正しさ」を意味します。これはカナン人が「悪い」と言われるのと対照をなします(4,5)。法廷で「無罪」の場合には「正しい」と判決され、反対に「有罪」の場合には「悪い」と判決されました。つまり、「私が正しいから、主が私にこの地を得させてくださったのだ」との心の中の声は、神の怒りを受けて滅ぼされる「悪い」カナン人と比べたら、自分は「正しく」「無罪」なのであって、だからこそ、「無罪」の報いとして、あるいはご褒美として、「主が私にこの地を得させてくださったのだ」と呟いていることになります。そしてモーセは、それがとんでもない危険な誤解であり、高慢な自惚れであると警告します。つまり、カナン人が悪くてイスラエル人が正しかったから、神はイスラエルにカナンを相続させてくださったのではなく、ただただ彼らの「先祖、アブラハム、イサク、ヤコブになさった誓いを果たすため」だと言うのです。

イスラエル自身は決して「正しい」者ではなく、むしろカナン人と同様に「悪い」者でありました。でも、それでも神は、まず、一方的に「先祖アブラハム」を選んで召し、さらには変わらぬいつくしみよって、誠実に「誓い」を果たされた結果として、彼らはカナンを相続できたのです。イスラエルはカナン人と変わらず罪深い者たちでした。

それで、モーセはこう付け加えます。「あなたはうなじのこわい民であるからだ。」(6)「うなじのこわい」の直訳は「うなじ(首)が硬い」で、神のことばに対して首を縦に振らない頑なさを意味します。事実、彼らは、シナイ山で十戒を授与された時にも、タブエラでも、マサでも、キプロテ・ハタアワでも、カデシュ・バルネアでも、要するに「エジプトの地を出た日から、この所に来るまで」、彼らは「主に逆らいどおし」でした(7)。シナイ山でモーセが四十日四十夜断食しながら十戒の二枚の石板を神からもらい受けている時、人々は「鑄物の牛」を造って偶像崇拜をして神の「激しい憤り」により根絶やしに瀕します。タブエラでは、神に不平をつぶやいたため、神の怒りの火が宿営の端をなめつくします(民数記 11:1-3)。マサ(メリバ)では、飲み水が無いと不平を言ったため、モーセまでもがカナン入りを差し止められます(17:1-7)。キプロテ・ハタアワでは、エジプトの食物を慕って主につぶやいたため、吐き気を催すほど大量のうずらの肉を与えられたものの、神の怒りにより激しい疫病で大勢が死んで葬られます(民数記 11章)。そしてカデシュ・バルネアでは、カナンへの神の突撃命令に背いたため、四十年も荒野をさまようこととなります。つまり、モーセが言うように、「エジプトの地を出た日から、この所に来るまで」、彼らは本当に「主に逆らいどおし」だったのです。

どうして、そのような「うなじの硬い」彼らが、神の民とされ、約束の地カナンを相続するよう召されたのでしょうか。それは、ただ神の一方的な恵みによることです。その神の愛はまさに罪人を愛する愛です。彼らがカナン人より「正しかったから」神は彼らを特別に扱ったわけではありません。彼らは世の人と少しも変わらず悪かったのですが、どんなに悪い罪人をも愛する神の愛が、神の憐れみが、彼らに祝福の地カナンを相続させてくれたのです。

以上をまとめます。カナン入りするまでは、不毛の荒野の中で、神の約束を信じ、みことばに従って前進することが何よりの課題でした。しかし、神の約束が成就して約束の地カナンに入ってから、おもに二つの誘惑にさらされます。一つは、心のうちで、「この私の力、私の手の力が、この富を築き上げたのだ」と自惚れる誘惑です(申命記 8:17)。もう一つは、「私が正しいから、主が私にこの地を得させてくださったのだ」と自惚れる誘惑です。これらは、カナン入りして、恵まれ、祝福された神の民、キリスト者の、新たな霊的な課題となります。神の前でのひたすらな謙遜を忘れて、傲慢になるのです。これに対して、モーセはこう警告します。「『私が正しいから、主が私にこの地を得させてくださったのだ。』と言ってはならない。」「あなたが彼らの地を所有することのできるのは、あなたが正しいからではなく、またあなたの心がまっすぐだからでもない。」

すべては神の恵みであることに感謝し、自分をではなく、神をほめたたえて、最期までお互い生きる者になりたいと願います。